

自分をいつくしんで見つめる子どもを育てる — 丹羽徳子の教育実践と思想に着目して — (要旨)

共育サブプログラム

藤野 香奈

【指導教員】 安藤聡彦 福島賢二 山田恵吾

【キーワード】 教育の思想 恵那の教育 生活綴方 子ども理解 丹羽徳子

はじめに

I, 問題の所在と目的

本研究は岐阜県恵那地域で1954年から1994年までの40年間、公立小学校の教員であった丹羽徳子の「いつくしむ」という教育の思想に着目して、生活綴方の教育との関係において明らかにしながら、教師が教育をする方向を見定めていくようなプロセスや教育の思想の意味を見出していくことを目的とした。

丹羽徳子(以下、丹羽と略す)は、子どもの内面にある問いや願いにふれ、子どもと教師が方向性をもって働きかけ合う人間的な成長を促すような教育活動を展開した。

1986年の中津川市立神坂小学校の6年生を担当した時の翌年の雑誌に掲載された教育実践の記録を中心に考察する。当時すでにベテラン教師であった丹羽がそれまでに培った自らの教育実践の技術とその土台にあったと考えられる「いつくしむ」思想が、子どもとのかかわりによって再構築されていくプロセスをたどり、「いつくしむ」思想がさらに深化していく様子を明らかにした。

本研究では中内敏夫の「*教育の思想とよばれるものは、教育的判断に対する価値判断、その技の前提に入り込み、あるいはこれを正当化し、さらにはこれを生きてゆく心の様態だということになる。教育思想とは、教育的人づくりの技を語っているものではなく、その技という判断力の一種に対する価値判断である*」という定義を元にした。

ここでは、①子どものよりよくなりたという願いを追求したこと②丹羽自身も人間としての弱さや困難さに向き合いながら内面に問い返し葛藤をしながらも価値を再構築していたこと、③丹羽は子どもとのかかわりの中で教師としての力量を形成していったことの3点を明らかにし、その結果、どのような思想が生み出されていたかということに着目して研究を進めた。

II, 研究の方法

研究の具体的な方法としては、丹羽の言葉や教育実践からの分析、雑誌文献、講演記録、学級文集、などの記録から分析を行った。

III, 各章の要旨

第1章

本章では、1986年に子どもたちと作り出していた丹羽の綴方実践に焦点を当て、子どもをいつくしむ土壌、子どもの自己開示を待つ姿勢、丹羽の子どもたちへの語りかけの特徴、子どもと教師が共に生きていく関係という4つの視点から、丹羽に形成されていた思想の骨格を明らかにしていくことを試みた。今起きている子どもの実態は、子どもが引き起こしているのではなく、周囲の大人や環境とのかかわりにある。子どもに限らず、人の行動や感情が成長していく側面は、人的及び物的環境や社会的事象や文化など、子どもの周囲を取り巻く環境に大きく影響を受けていることを示していた。同時に教師が捉える「今」の子どもの姿は、環境に作用され、出現した結果であることから、丹羽実践を結晶化したものとして「いつくしむ」思想が形成されたことを示した。

第2章

本章では、1980年代に入り、子どもの人間的な「願い」を追求してきた丹羽は時代の物質的な豊かさの反面、変化子どもの「求めるもの」が切実な社会や家庭に踏み込む必要があるものへと変化していく様子を捉えた。子どもたちが求める人間的なぬくもりを学級の中でなかまとともに育もうとした丹羽がさらに子ども理解を深化させていく様子を示した。

第3章

丹羽は、一人の人間としていつくしまれる経験が難しい状況にある子どもが人間的なものを求めていると感じていた。学級の中で子どもが生活感情をかたちづくる言葉を獲得し、自分のことをいつくしむことができるようにとさらに実践を深めていこうとした。子どもたちが過去の具体的な事実に目をむけ、困難をつかみ、自分自身を見つめる段階になってきた。そこで、自己への肯定に目を向けられるように真智子さんの綴方の実践を行ったのである。

子どもは、過去の困難を潜り抜けた時に「自分をいつくしむ」ことができる。「丹羽の言う「いつくしむ」とは「自分で自分のことをいつくしむ」いうことであり、「たのしい」ことであってもその経験を内面化することで、子どもは自分を通して成長していくということが明らかになった。

IV, 研究の成果と課題

丹羽徳子の「いつくしむ」思想に着目しながら1986年の教育実践を分析し検討した結果、丹羽の「いつくしむ」思想は、「子どもが自分をいつくしんで見つめることができるようにする」ということであり、丹羽は生活綴方の実践を行いながら、その思想を深めてきたことが明らかになった。

また、今回、丹羽の思想や生活綴方の実践を通して、近年の深刻な教育問題の問題についての示唆を得ることができた。日本の教師たちが生み出した教育の思想を辿ることは、今日の教育課題に対して解決の糸口や困難に向き合う励ましを与えてくれることが明らかになった。

今後の課題を三点挙げる。一つ目は1986年実践から視野を広げ丹羽徳子の40思想過程を分析して検証していく必要があること。二つ目は、今回の1986年実践では、いつくしむ思想と「自由」との関連については十分に検討できなかった点。そして、三つ目は、丹羽と共にその時代を作っていた恵那の教師の思想がどのように反映されていたのか追求していきたい。それらを現代の教育における課題を論じる時の手がかりとしていきたい。

主な参考文献

丹羽徳子『明日に向かって(上・下)』草土文化、1982年
田中孝彦『子どもの発達と人間像』青木書店、1983年
他